The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マザリナードと公衆 ： レ枢機卿のマザリナードを例に
Author(s)	涌井, 萌子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2021, 55, p. 55-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91483
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マザリナードと公衆

──レ枢機卿のマザリナードを例に──

涌井　萌子

キーワード：マザリナード／レ枢機卿／説得文書／公衆

フランスにおける公衆の成立は、一般的に公教育の普及と同時とされるが、R・マンドルー『民衆本の世界』[1] やR・シャルチェの研究[2] の研究に見られるように、1960年代以降の近世フランスの読書の文化史研究においては、アンシァン・レジーム期において既に公衆あるいは「世論」と呼ばれるものが存在していたのではないかとされている。阿川雄二郎[3] はこの「世論」について、ハーバーマスが提起する「政治的公共空間」論を参照した「自立的な『個』をベースに、自由な批判や評論が公的におこなわれる空間[4]」として紹介しており、ハーバーマスはこの「公共空間」について「文芸共和国 République des lettres」と同時期の18世紀後半に成立したとしている。[5]

ところが、「公共空間」成立の1世紀ほど前、ルイ14世の即位前後の時期に起こったフロンド La Fronde において、既に「世論」と呼びうる「公共空間」に作用し、その支持を取り付けるために書かれた文書群が存在した。そこで、本論ではマザリナード La mazarinade と呼ばれる当該文書群における読者としての「公共空間」の性質を整理した上で、その「公共空間」に関与することで利益を得ようとしたレ枢機卿 Cardinal de Retz の例を取り上げる。レはフロンドの主だった参加者の一人であり、フロンドを回顧した『メモワール *Mémoires*[6]』においてマザリナードによる「公共空間」への働きかけを記述している人物である。レ枢機卿の例を通して、17世紀半ばの「公共

空間」の特徴を明らかにすることを目指す。

1. マザリナードと「公共空間」

マザリナードは、フロンドの時期に出版された、乱に関連した政治的な内容を持つ出版物である。[7] 辞書の定義は「反マザラン」という形容詞を付しているものが多いが、文書群にはマザランに反抗的なテクストに留まらず、フロンドに関する内容が書かれたテクストが含まれる。対象や目的が多種多様であり、また攻撃を主眼とするために誹謗中傷や虚飾・潤色を多く含むこれらのテクスト群は、およそ5600種類がフランスを中心に現存する。

物語や詩、陳情書など様々な形態を取るマザリナードだが、本論で扱うレ枢機卿を含むフロンドに参加した政治家や宗教家によって、党派間でのヘゲモニー争いの道具として用いられる場合、論争文書 écrit polémique の性質を持つテクストとして扱われる。論争文書としてのマザリナードはその説得対象として、マザリナードを用いて誹謗中傷などの攻撃を加えた政敵、自党に属する支持者たちが想定される他、C・ジュオーが「説得の行われる公共空間[8]」としてのイメージを与えている民衆の読者が想定されている。

ジュオーは、マザリナードを読む読み手が一人であろうと集団であろうと、公的な場で読んでいようと私的な場で読んでいようと、マザリナードの前に広がる読書空間を、テクストによる説得が行われる「公共空間」と見なしているのだが、具体的にどのようなイメージを持つべきなのか、レ枢機卿の『メモワール』における彼自身のマザリナードに関する著述から明らかにしたい。

2. レ枢機卿のマザリナード

レ枢機卿のマザリナードに立ち入る前に、彼のフロンドとの関わりについて見ておきたい。フロンド勃発当時の 1648 年 5 月、レはパリ大司教である

叔父の大司教補としてノートルダムにいた。しかし彼が明確に反宮廷・反マザランとしてフロンドに参加するようになったのは乱の勃発から少し経った後、8月26日のことである。この決定的な訣別の日の出来事について、レは『メモワール』に詳細を記している。[9)]

レ枢機卿はフロンドに参加する中で何度も、宮廷側、反宮廷側の間で立場を変えている。この転身に対して、敵対する陣営、特にコンデ親王の陣営からは「利己的なものだ」というパンフレ攻撃が盛んに行われた。コンデ親王らの口撃に対抗すべく、自己弁護として用いたり、反撃に用いたりしたのが後世「マザリナード」と呼ばれるパンフレであり、そのことが『メモワール』内で述べられており、レ枢機卿が書いたマザリナードとしては1651年と1652年に書かれた7編が考えられている。[10)] このことから、レ枢機卿にとってのパンフレは特にコンデ親王との政争の道具としての役割を担っている。

では、レ枢機卿はどのようにマザリナードを用いて「公共空間」に作用しようと試みたのだろうか？以下は『メモワール』におけるマザリナード運用に関する記述である。

> 私は昼食の時間に決まってパンフレを持ってこさせ、食事が終わる時、わが邸に居合わせた人々の前で読んだ。こうした類の罵言を軽蔑していることが人々に十分わかってもらえたと判断したうえで、私はそれらのパンフレに応酬できるところを公衆に見せることに決めた。私はそのために、十分な注意を払って、短いけれども全体に関わる返答に取り組み、それに『古き正当なるフロンドの弁明』と題名を付けた。［中略］私はパリで50名の呼び込み行商人にそれを大声で読み上げさせ、売り捌かせた。行商人たちは同時にあちこちの通りに現れ、いずれの通りでも、あらかじめ配置しておいたものたちによって援助されていた。（*Mémoire*, II, p.186.）

「パンフレに応酬できるところを見せる」という役割を担っていることから

も、レ枢機卿にとってのマザリナードが一種のプロパガンダとしての機能を持つ文書であることがわかる。[11)]

レ枢機卿の記述に見られるテクストの受容者、すなわち説得対象とされている人々の集合体「説得が行われる公共空間」は主に集団が想定されていることが分かる。さらに注目すべきは、レ枢機卿の邸宅に集まった人々であれ、パリの市民であれ、いずれにしても音読によってテクストを受容しているという点である。邸宅においてはレ枢機卿の、パリの町においては呼び込み行商人colporteur[12)] の声を通して、テクストの内容を理解している。[13)]

3. 耳で聞く読書とレトリック

レ枢機卿のマザリナードにおける受容者は読み手の声を通じて、マザリナードを「耳で聞く」ことによって受容する。公衆の関心を引き付ける効果として、見聞きして受容する対象に宛てたと考えられるテクスト上の特徴がいくつかある。「列挙や修辞疑問の多用といった過剰な修辞」「客観性のある一人称体」をその例として取り上げる。

3.1. 過剰な修辞（1）要素の列挙

耳で聞くことによってテクストを受容する公衆を楽しませるための修辞上の工夫を見ていく。レ枢機卿は、テクストの朗読を耳で聴く公衆が主張を理解しやすく、軽蔑されるべきビュルレスク文体にならない範囲で創意工夫を凝らしている。特にレ枢機卿のマザリナードの中で見られるのは過剰なほど要素を並べ立てる「列挙法」である。「列挙法」とは語句や文をいくつも重ねることであり、ある対象細部を次々と描写したり、人や対象あるいは事態の性格を多面的に挙げたりして印象を鮮明にし、さらには根拠をいくつも挙げていって説得力を増すなどの効果がある

正当なるフロンドについて卑怯な詐欺師であり、忌むべき私生児である

あなたがたには、黙っていていただきたい。あなたがたがマザランの人となりを常に称賛した後でマザランの名前を激しくこきおろし、活気にあふれたマザランを崇拝した後でマザランが死ぬことを強く求め、マザランの控室で意気地なくマザランに言い寄る一方、私たちの華々しい高位聖職者は勇敢に、マザランの権力が生まれ、強くなっていくことに反対している。あなたがたがマザランの命令の下で、パリを包囲する軍隊の中で戦っている一方、私たちの自由の勇敢な守護者は私たちの命を守るために命を晒している。あなたがたがこの宰相マザランの加護や恩恵を求めていた時、大司教補殿は自分に豊富に与えられた材も栄華も拒否していた。あなたがたは、与えられた言葉や署名された契約による損害に対して宮廷の中でマザラン枢機卿の残り物や産物を守ったが、すぐにあなたがたはそれらの産物からマザランの反感の大部分を占めたものを追い出した。あなたがたはいつもマザランの奴隷だった、マザランが権力者であった間は。そしてあなたがたは王の権威が弱く、臆病な宰相によって奪われて以降、王の権威を認知することはもはやなくなった。そしてあなたがたは、マザランがあなたがたの強欲を満足させているところの恩恵の力のために、奪われた王の権威を認めざるを得なかった。あなたがたは結局、あなたがたの野心を満足させるマザランの友たちの支配力の中にいなかったことによってのみ、マザランの友人たちと仲違いをしている。あなたがたは今、おそらくあなたがたが団結するためだけにマザランの闇を攻撃している、まるであなたがたが同じような遭遇をした、より厳密に言えば彼の人となりについて言っていたように。そしてあなたがたは、あなたがたがどう言おうとも常にマザラン的である。つまり公衆の敵であり、信奉者たちの扇動者であり、全国的な平和の障害であり、あなたがたのいさかいによって全体の平和を妨げている。（*Défense de l'ancienne Fronde*, p.467-468.）

この列挙は全体として相手の不正性を告発し、その不正性と対極にある

「華々しい高位聖職者」や「私たちの自由の勇敢な守護者」としての自分の清廉潔白なさまを述べている部分である。傍線を付した « qui » で結ばれた 10 個の関係詞節は全て最終部の「あなたがたは国の平和の敵である」という宣告の根拠となっている。

上記の『古き正当なるフロンドの擁護』における列挙表現は、根拠の羅列として論理的性格を持っているが、レ枢機卿のマザリナードにおいては感情的な短文の列挙も見られる。特に 1652 年の『親王殿下の宰相であるシャヴィニ伯の場違いな振る舞い』では、「なんという場違いか！」« Quel contretemps! » という感嘆文が繰り返し現れる。シャヴィニ伯の行動の過ちを告発するというこの作品の目的が顕著に現れた感嘆文であるが、「場違い」と判断される根拠が複数示されることで彼の主張が正当性を持つようになると同時に、その一方的な畳みかけは冷静さを欠いているように見える。[14)]

つまりレ枢機卿にとって列挙表現は、一方では自分の論を固める冷静さを伴うものであったが、他方では手加減なく相手をやり込める感情的なものである。

この「列挙」に与えられた二面的な役割は恐らく、前述の「不均質な読者」の問題に関連したものであると考えられる。列挙の規模によってその修辞上の工夫が客観性を高めるものであるのか、論のスピードを高め、語調を強めるものであるのか区別することができず、その両者を狙ったものであるであるとすれば、「公共空間」に存在する様々な「個」をより多く説得するための戦略であると考えられる。

3.2. 過剰な修辞（2）修辞疑問文の羅列

要素の羅列を好むレ枢機卿だが、特に修辞疑問文を羅列する表現は、レ枢機卿のマザリナード全 7 編のうち 4 編において見られる。これらの修辞疑問文は、直後に記述された主張に到達するための根拠の羅列という役割を担っている。

自分の最大の力で攻撃し、数えきれない様々な衝突の中でひどく傷を負わせ、その宰相らの尊厳によって二人の間に存在する自然な嫉妬心によってその宰相の偉大さをレ枢機卿の偉大さと比べることができなかった宰相について、レ枢機卿がその宰相の地位を保持することを望み、勢力拡大を引き起こすように見えるのか？レ枢機卿はマザラン枢機卿の約束を信用するほど愚かなのか？レ枢機卿はここに至るまで、マザラン枢機卿の帰還を引き起こすほど親王殿下の利益に執着しているように、コンデ親王がギュイエンヌで得た不幸な結果が失わせた全ての優越性を、レ枢機卿がコンデ親王に再び与えたように見えるのか？レ枢機卿は、パリに親王殿下を迎え入れさせることができることだけに何らかの利益を見出していたのか？もしもレ枢機卿が善なる人として行動しようとしているのであれば、レ枢機卿は国家に致命的な行動に貢献しようと決心するだろうか？もしも野心がレ枢機卿の行動原理なのであれば、レ枢機卿はマザランの回復を、宮廷において絶大な権力を持つ宰相の回復を、彼の最も親しい友人たちに対しても国政に関して何も残さない寵臣の回復を取っただろうか？レ枢機卿は、思うに、マザランの権威回復をレ枢機卿の情熱を満たすための自分自身の強固な道具のように利用していたのだろうか？今言ったことは真実かもしれないが、もっともらしくないと告白すべきだろう。

（*Le Vraisemblable*, p.628.）

『レ枢機卿殿の振る舞いの真実らしさ』では、レ枢機卿陣営やコンデ親王陣営などからそれ以前に出されたパンフレの主張に「もっともらしさ」« vraisemblable » があるかどうかということを検証が徹底して行われている。ここで列挙されている修辞疑問文が誘導したい結論は、コンデ親王陣営からの言説や批判に真実らしさはなく、レ枢機卿の行動に正当性があるということである。

結論を導く根拠としてではなく、根拠そのものの補強として繰り返し使わ

れる場合もある。

> これほど多くの書き物が何の役に立つというのか？これほど多くの罵言が何の役に立つというのか？かくも頻繁に行われる謝罪が何の役に立つのか？
> （*Le Solitaire aux deux désintéressés*, p.501.）

いずれの場合においてもある対象や主題にとどまって、表現を変えつつ要素を繰り返し、主張の正当性を表現し、強化している。

表現を少しずつ変えながら、くり返していくこの類義累積は、累積される数が増えれば増えるほど確かに主張を強化する論拠を提示し、一見正当性を高める。その一方で修辞疑問文の羅列は、問いかけの繰り返しによって公衆を議論に抱合する機能を持つ他、「語り口の滑らかさ」とも捉えられ、空疎な弁舌の印象を与える危険があるという両義性を持っている。

前述の通りマザリナードにおける「公共空間」は不均質であり、単純に累積されていく要素の過剰さに対して面白さを見出す公衆と、あくまでも政治的な論争文書として、列挙される根拠とそれによって導かれる主張を注視している公衆がいると想定される。しかしいずれの場合においても、声を通して受容しているという共通項が存在し、この点において繰り返される表現は「面白さ」と「分かり易さ」として機能すると考えられる。つまり両義性のある修辞を持つテクストは、複数の質を持つ「公共空間」において、説得や同意獲得のより遠い射程を持ったと考えられる。

3.3. 客観性のある一人称体

ジュオーによると、誰かに自分自身の政治的主張を説得する目的を持つ多くのマザリナードの場合、主語として人間一般を示す不特定の « on » を用い、その主張の客観性を保とうとする。[15] しかし、レ枢機卿のマザリナードで語りだすのは、あらゆる側面からレ枢機卿を擁護し、コンデ親王を攻撃す

る « je » である。以下は『古き正当なるフロンドの擁護』の冒頭部分である。

> 善良な行為によってよりも嫌味のある言葉を繰り返す方がよいということにはなり得ない。大司教補殿の心が畏敬の上にあり、精神が好奇心の上にあるのと同様、大司教補殿の評判は誹謗や中傷の上にある。私は大司教補殿の評判に対して、世界を腐敗させている忌まわしいこれらの誹謗中傷文に反駁するつもりはない。私は、それらの誹謗中傷文は、かつてマザランについてだったものを私たちに宛てようとした人々と同じ作者による不幸な作品だと考えている。私はパリを包囲した人々が大司教補殿に対して描写するすべての言葉を、大司教補殿の栄光に対して掲げられた戦利品と見なしている。言ってみれば、私はパリを包囲した人々に対してこれらの激情を大目に見るという十分に正当な行為を行っている。そして私は、パリを包囲した人々に対して、それらの人々の敵意のこもった不誠実な態度から得る公衆の認識に対して何も加えることがない罵詈雑言によって応じる代わりに、あるいは私の考えでは、大司教補殿の行動ほど十分に潔白な行動には少しも必要がないような弁明によって応じる代わりに、大司教補殿の擁護のために、温和さをもって、古代ローマの偉人の一人がかつて自分自身の栄光について称賛をもって行ったことをここで行うにとどめよう。
> （*Défense de l'ancienne Fronde*, p.466-467.）

書き出しこそ « on » であるが、その後主語をとってかわる「私 « je »」はレ枢機卿本人ではなく、当時、大司教補 Coadjuteur であったレ枢機卿を擁護する人物である。ここでの「私」の人物設定は詳しく描かれておらず、「パリに住む大司教補殿の信奉者」としての虚構の「私」の真実らしさは、その存在が実在するかしないかではなくあくまでその「語り」による。レ枢機卿本人ではなく、詳細が明らかにされていないからこそ何者にでもなりうる「私」に自己の主張を代弁させることは、マザリナードの書き手の可能性を

際限なく押し広げ、内容を一般化させ、あたかもレ枢機卿がパリに住むあらゆる人物によって擁護されているような錯覚を起こさせるとも言える。

レ枢機卿は語りの主体に「私」を置き、本来、主観的な意思表明を行う主語と考えられる「私」に客観性を持たせようと試みる。上記の『古き正当なるフロンドの擁護』では客観的な論理展開を進めるために、自分自身ではない第三者の「私」を設定した。レ枢機卿のマザリナードにはこの「客観性のある一人称体」という倒錯した設定がしばしば見られる。[16)] この倒錯は独り善がりに陥りかねない。実際のところ、コンデ親王に雇われた文筆家で、マザリナードを通してレ枢機卿を攻撃したデュボスク・モンタンドレはその「主張の強すぎる私」を詭弁として攻撃した。

レ枢機卿が「客観性のある一人称体」を多用している理由を考えた場合、公衆がマザリナードを、他人が読んでいる声を通して読んだということが影響していると考えられる。レ枢機卿本人あるいは呼び込み行商人が朗読したものを聞くという読書形態においては、三人称や不定代名詞「人は」« on » あるいは間接話法の語りよりも「私は」« je » という一人称体や直接的な語りの方が、より明快に主張を伝えることができたと考えられる。

まとめ　レトリックに見る17世紀の「公共空間」

本論では、マザリナード受容の状況を「公共空間」として整理し、テクストの特徴について読者の受容形態との関連の中で分析した。「列挙や修辞疑問の多用といった過剰な修辞」「客観性のある一人称体」の例より、レ枢機卿のマザリナードには、読み上げられるテクストとして、多様で不均質な読者を説得し、魅了するための執筆上の工夫が施されていることが分かる。これは「プロパガンダ」を目的とする説得文書としてのマザリナードの特徴と言えるだろう。

レ枢機卿の証言や、マザリナード研究における「説得が行われる公共空間」のイメージを参照する限り、17 世紀半ばのマザリナード受容における

読書の行われる「公共空間」は、ハーバーマスの「政治的公共空間」論を参照した「自立的な『個』をベースに、自由な批判や評論が公的におこなわれる空間」と同一視することはできない。その理由として、第一には、レ枢機卿の邸宅の読書集団とパリ市内の読書集団との相違もさることながら、それぞれの読書集団を構成する「個」と「個」の間にも文化的あるいは社会的な違いがあり、一括して考えることは難しいからである。第二には、マザリナードにおける「公共空間」はあくまでテクストを受容する空間として発生し、テクスト受容が終了とするとともに消滅するため、社会において「世論」あるいは「公論」と呼びうるほどの力や存在の安定性も持たないからである。

しかし、それらの人々をその場で一時的に纏めるのが、マザリナードというテクストである。あるテクストが不均質な人々を、朗読者の声の届く範囲で「読者」として緩やかにまとめているのが、マザリナードにおける「公共空間」と考えられるだろう。そして、この「公共空間」において支持や同意を取り付けることにどれほどの価値があったのかは定かではないにしろ、支持や同意を得ようという試みが、今回扱ったレトリックを含めテクストの随所に見られる。以上のことから、17 世紀の「公共空間」は 18 世紀以降の革命につながる「公共空間」とは性質を異にしつつも、ある側面では「世論」と呼びうるものだったと言えるだろう。

［注］

1） ロベール・マンドルー『民衆本の世界　17・18 世紀フランスの民衆文化』二宮宏之、長谷川輝夫訳、人文書院、1988 年。
2） ロジェ・シャルチエ『書物の秩序』長谷川輝夫訳、文化科学高等研究院、1993 年。同『読書と読者』長谷川輝夫、宮下志朗訳、みすず書房、1994 年。
3） 阿川雄二郎「近世フランスの図書館事情」日本学術振興会科学研究費補助金［基盤研究（C）（2）課題番号 11610394］研究成果報告書、p. 6-23。
4） 同、p. 6。

5）　ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換　市民社会の一カテゴリーについての探究』細谷貞雄、山田正行訳、第二版、未来社、1994年。

6）　Cardinal de Retz, *Mémoires*, volume I et II, dans *Œuvres complètes*, textes établis avec introduction, notes, bibliographie, reproductions de manuscrits, illustrations, index des noms de personnes, index des noms de lieux, par Jacques Delon, Paris, H. Champion, 2015.（本文中での『メモワール』からの引用および参照にはすべて拙訳を用い、以降、巻号を付して（*Mémoire*, 巻号, ページ数）のように示す。）

7）　*Dictionnaire des lettres françaises, Le XVIIe siècle*, édition entièrement révisée, amendée et mise à jour sous la direction de Patrick Dandrey, Paris, Fayard, 1996, *s. v.* « Mazarinades », par Hubert Carrier, p. 829.

8）　クリスチアン・ジュオー『マザリナード　言葉のフロンド』嶋中博章、野呂康訳、水声社、2012年、p. 12。ただし、前述のハーバーマスが挙げた「政治的公共空間」と完全に同一視できない点には注意したい。阿川によると、「政治的公共空間」は「社会を構成する人びとの参加による『透明』で『均質』な空間」とされているが、マザリナードにおける読者集団としての「説得が行われる公共空間」は誰がその場にいるのかは不透明であり、空間を形成する「個」の社会的地位や文化的背景はあくまで不均質なものである。

9）　*Mémoire*, I, p. 447.

10）　レ枢機卿作品全集・作品選集及びマザリナード国際共同研究サイト Recherches internatuinals sur les Mazarinade ではこの他にも複数のマザリナードがレ枢機卿のものとして紹介されている。ここでは、Les Grands Écrivains de la France やプレイヤッド等いずれの全集・作品集においてもレ枢機卿に帰属が認められている7編を「レ枢機卿のマザリナード」として扱う。引用にあたっては、最新版の全集（Cardinal de Retz, *Conjuration de Fiesque et Pamphlets*, textes établis, avec introduction, notes, bibliographie, index des noms de personnes, index des noms de lieux, reproduction de manuscrits, illustrations, par Jacques Delon, Paris, Honoré Champion, 2011.）を用い、（作品名, ページ数）のように示す。なお、引用中の傍線は筆者による。

11）　レ枢機卿はマザリナードが公衆説得の道具であることを自認している。レ枢機卿によるマザリナード内の以下のような記述にも明らかである。「少し前からレ枢機卿の目的について作られていた中傷文は私たちに、レ枢機卿がマザランの利益を下支えしていると信じさせようとしている。」（*Le Vraisemblable*, p. 627.）「公衆に広まっている数えきれない文書や文章によって、レ枢機卿殿が宮廷で契約を行ったということを私たちに説得しようとしていた。」（同、p. 628。）

12）　H・キャリエによると、呼び込み行商人は往来に向かってその題名を喧伝しながらパンフレを売り、「公衆の希望を察して叶え、公衆の興味を刺激するという

やり方が、店の売り台での販売と全く違った効果を必然的に持った」とされている。(Hubert Carrier, *La presse de la Fronde (1648-1653) : les Mazarinades*, t.2, Les hommes du livre, Genève, Droz, 1991.)

13) ただし、レ枢機卿は邸宅における集団読書を「人々の前で読む lire publiquement」とし、パリ市内における頒布を「大声で読み上げ、売り捌く crier et débiter」としているという記述の相違点には留意しなければならない。つまり、後者はパンフレを商品として扱っているために、文書の内容全てを読み上げたとは考え難い。しかし、商業的役割の有無が読み上げられる文量にどれほど影響したのかは定かではないため、いずれの場合でも「内容の読み上げが行われた」ものとして扱う。

14) 「けれども列挙(羅列)は、じつは数多くの内容を語ろうとしてけっきょく冗漫に《おちいってしまう》方法でもある」(佐藤信夫『レトリック感覚』講談社学術文庫、1992 年、p. 262。)プレイヤッド編者の M・ペルノは、レ枢機卿の他のマザリナードと比較し、このテクストが「全ての手加減が失われている」としている。(Cardinal de Retz, *Œuvres*, édition établie par Marie-Thérèse Hipp et Michel Pernot, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1984, p. 1183.)

15) 「真実らしさは、たいてい『人は』(不定代名詞の on)で表される。真実らしさは『個人の信条を全体の同意の中に潜り込ませる』」(前掲書、ジュオー『マザリナード　言葉のフロンド』、p. 120。)

16) 特に、第二のマザリナード『隠士と私心のない二人の人物』における「私」は詳細な人物設定が与えられている。「隠士」は俗世間から離れた岩山にいたが、世間の騒擾を憂い、平和の使者としての役割を果たすために山を下りてくる。あくまで「大司教補殿」「親王殿下」の間で中立であるという体裁をとりながら、両者の行動や主張の正当性を判定する者として振舞う。

［参考文献］

［一次文献］

Cardinal de Retz, *Œuvres*, édition établie par Marie-Thérèse Hipp et Michel Pernot, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1984.

Cardinal de Retz, *Conjuration de Fiesque et Pamphlets*, textes établis, avec introduction, notes, bibliographie, index des noms de personnes, index des noms de lieux, reproduction de manuscrits, illustrations, par Jacques Delon, Paris, Honoré Champion, 2011.

Cardinal de Retz, *Mémoires*, volume I et II, dans *Œuvres complètes*, textes établis avec

introduction, notes, bibliographie, reproductions de manuscrits, illustrations, index des noms de personnes, index des noms de lieux, par Jacques Delon, Paris, H. Champion, 2015.

［研究書］

CARRIER(Hubert), *La Presse de la Fronde (1648-1653) : les Mazarinades*, t.2, Les hommes du livre, Genève, Droz, 1991.

クリスチアン・ジュオー『マザリナード　言葉のフロンド』嶋中博章、野呂康訳、水声社、2012年。

ロベール・マンドルー『民衆本の世界　17・18世紀フランスの民衆文化』二宮宏之、長谷川輝夫訳、人文書院、1988年。

ロジェ・シャルチエ『書物の秩序』長谷川輝夫訳、文化科学高等研究院、1993年。

同『読書と読者』長谷川輝夫、宮下志朗訳、みすず書房、1994年。

［辞書、事典］

FURETIÈRE (Antoine), *Dictionnaire universel, contenant généralement tous les mots français, tant vieux que modernes, et les termes de toutes les sciences et des arts*, La Haye et Rotterdam, Arnot et Reinier Leers, 1690.

Dictionnaire des lettres françaises, Le XVIIe siècle, édition entièrement révisée, amendée et mise à jour sous la direction de Patrick Dandrey, Paris, Fayard, 1996.

［参照サイト］

Recherches internationals sur les Mazarinade (http://mazarinades.org/)

付記：本稿はJSPS科研費 21J21298 による研究成果の一部である。

（大学院博士後期課程学生／日本学術振興会特別研究員）

Résumé

Les mazarinades et leurs « publics »

Sur les libelles du Cardinal de Retz

Moeko Wakui

Le mouvement de contestation politique connu sous le désignant de la Fronde (1648-1653) a produit une masse de textes, les « mazarinades », qui visaient à rallier ce qu'on peut appeler « l'espace public ». Après avoir examiné quel type d'« espace public » ce corpus construit à l'usage de ses lecteurs, nous nous penchons sur le cas de Jean François Paul de Gondi, Cardinal de Retz, qui présente l'intérêt d'avoir été l'un des principaux acteurs de la Fronde, ainsi que l'un des artisans, des protagonistes, et des penseurs de cet « espace public », auquel il consacre d'importantes réflexions dans ses *Mémoires*.

Le but de cette étude est donc, après une mise au point terminologique préalable sur les définitions respectives de la Fronde et des mazarinades, de préciser les caractéristiques de « l'espace public » au milieu du XVIIe siècle, et de repérer la place singulière qu'y occupe le Cardinal de Retz. Nous verrons qu'il s'adresse à deux « publics » distincts, dont nous nous emploierons à cerner les contours à la lecture de ses *Mémoires*, ainsi qu'à travers les structures logiques et rhétoriques de ses écrits politiques. Les mazarinades de Retz charrient une énergie, une émotion, une ferveur, largement incompatibles avec la froideur de l'écrit logique, rationnel, et même polémique. Ces qualités les destinent essentiellement à un « public » populaire, qui jouit, à travers ces textes, d'un divertissement éphémère. Il serait néanmoins erroné de croire que ces mazarinades visent exclusivement ce « public » populaire. Leur première cible reste le « public » cultivé. Notre thèse est que le discours pamphlétaire de Retz s'emploie à toucher simultanément ces deux cibles mutuellement exclusives.